

命をつなく

小児がん

治療の

現場から

A ちゃんは急性白血病の幼稚園児。入院当初は両親が部屋からいなくなると大きな声で泣いていました。入院して半年がたったある日、お母さんの体調が悪く、Aちゃんは一人病室で3日間過ごすことになりました。大人たちの不安をよそにAちゃんは絵本やアニメを見て、おもちゃで遊び、よく寝て、一度も泣くことはありませんでした。声をかけるく、「一人で寝れるよ、大人になったよ」、「早く元気になるってね」とお母さんにお手紙を書いたよ」と答えてくれました。

小児がんの子どもの入院生活は通常半年、時には一年以上にもなります。化学療法(抗がん剤)、手術、放射線など治療が続ぎ、吐き気、抜け毛・食欲低下に悩まされ、免疫力が低下し、体力そのものが奪われます。通っていた幼稚園や学校に行けず、きょうだいとも会えなくなるります。

これまでの生活とは全く違う入院の期間も子どもたちは成長発達段階にあります。乳児・幼児にとって遊びは身体機能、情緒、社会性の発達に重要なものであり、遊ぶことはストレスの軽減や精神の安定につながります。私たちは、治療中の子どものための遊び時間を確保し、季節に合わせた行事、お花

第⑤回

寄り添い支える

遊びも学びも 成長発達を支える看護

見会・子どもの日のお楽しみ会・七夕会・クリスマス会などを催します。歩くこともままならなかった子どもたちが、お花見をする時は院外の桜の木の下に続く道のりを頭張って歩けたりします。

入院中の子どもたちが一緒に行動するとして、季節を感じることは治療を乗り切る原動力になっています。小学生や中学生は学習の時間も確保する必要があり、院内学級や通っていた学校のリモート授業に参加します。私たち看護師は子どもたちが授業に集中できるように、学校の先生方と健康状態を共有しながら環境を整えます。

入院治療を受ける子どもたちは副作用を乗り越えながら、医療者や病氣と闘うほかの子どもたちと出会う中で確実に強くなっています。看護師は計画された治療が滞りなく進むよう子どもたちに24時間寄り添い入院生活を支援しています。子どもたちが成長する姿は私たちのエネルギーの源です。

